季刊

直江の津

◉かみえちごを考える◉

通巻29号

春号

2008

3,4,5月

シリーズ 上越（かみえちご）後のかたち 「上越学」への試み

【国都】を探せ 謎の越後国府

小木～航路 旅情編 残響の島 佐渡へ

巻頭エッセイ◉このまちのこと

いのち明滅する町　高田

この人に学べ

直江津今町が生んだ偉大な数学者

小林百哺

【文学の旅】

◉十返舎一九

ぬれ手に粟…「金草鞋」の旅

季刊 直江の津 第29号 春号
2008—3・4・5

目　　次

■巻頭エッセイ・このまちのこと
いのち明滅する町　高田　荒川 毅　3

■シリーズ上越後のかたち
【国都】を探せ　謎の越後国府　小島幸雄　4

■小木から始める佐渡の旅
小木航路　旅情編　関原 剛　14

■文学の旅
十返舎一九　ぬれ手に粟…「金草鞋」の旅　18

■この人に学べ　小林百哺　20

■カメラの眼　12

■読書びと
やさしさ病棟　徳永 進著　22

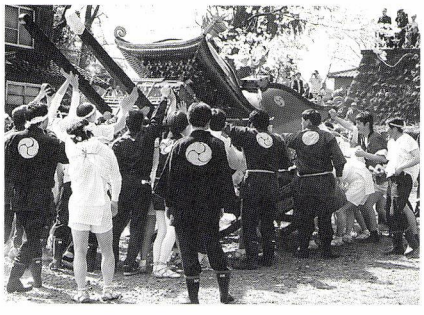
■建物さんぽ　26

■投稿　23

■アルバムの一枚　30

■上越信用金庫 上越産業振興研究所レポート　28

表紙筆文字は町名改正の願いの筆跡（明治11年「福永家文書」）より。
「直江の津」とは中世の物語に登場する直江津のことである。


早川谷日光寺のけんか祭

♣巻頭エッセイ
荒川毅さんのこと

昭和34年新潟市生まれ、筑波大学情報学類卒。新潟放送を経て現・上越ケーブルビジョン。(財)日本自然保護協会会員　いもり池ビジターセンター・パークボランティア。
ＴＶドキュメンタリー制作で第10回文化庁・芸術作品賞／第５回アースビジョン国際環境映像祭入賞／第３回国際野生生物映像祭入賞等。
荒川さんは、ＪＣＶの人気番組「くびき野みんなのテレビ局」の生みの親であるとともに育ての親。

いのち明滅する町　高田

荒川　毅

かたくり浄土　むらさき浄土　風ふけば　花さやさやと　地に満ちゆらぐ　上田三四二

恥ずかしながら、三十代になるまでカタクリを知らなかった。ナラやブナの森に入ったこともなかった。新潟から上越に移り住み、今年で十一年目、今は、四季おりおりの自然を「溺愛」している。アカゲラの凛々しい姿にはじめて見惚れたのも早春の五智公園だ。

都会での軽薄な生活から自然に目をうつすきっかけは、家庭崩壊だった。「お互いに別の道をいきましょう」そう云って、学生結婚した「彼女」が東京に行ってしまったのが三十歳の時。四歳の娘を抱えて途方にくれた。「パパ、おやまってどんなところかなぁ?……。いってみたい……」。数日後、はじめての山にとびこんだ。初夏の笹ヶ峰だった。白樺のキャンプ場をぼんやりながめていると、「パパ、ありがとう」と云って娘が駆けだした。「おまえ、何やってんだ?」娘はおおきな木のくびれに抱きついたまま目をつむり、いつまでもそうしていた……。

騒々しい報道の仕事に追われながら、娘との野あそびがはじまった。「わぁ、どんぐりさん、こんにちわぁ!むむむ、この足あとはだぁれだ?」

生きるよろこびは　山のひかりの中にあった。

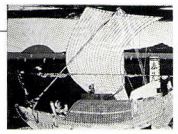
夜は、親子で賢治童話の世界にひたった。ちいさな渓にイワナの影を追い、「クラムボンの笑い声」をきいたのも、黄葉のブナ林で「やまねこ」に会ったのも、いつも娘が先だった。そうしながら数年がたって、私たち父子は高田育ちの女性とめぐりあえた。

「ほぉら　これがさ　カタコの花だわね　きれいだねかね　ずぅっと見てないや」

妻は、たおやかなひとだ。そして、もぉもぉと湯気をたて、カタコを茹でるのだった。(そうか、食べてもいいのか!)娘とふたり、しあわせの方程式が解けた気分だった。

家族いっしょに雁木をわたる日々!(うふふ　おまんねぇ　やわやわやりないや)朝市のかあちゃ、ばあちゃと笑い倒しあう。母に手をひかれ背をおされながら、長女は、「泥つき野菜は汚い」という友だちを説得するアネサに育ってくれた……。この春、新自由主義の乱世に巣立つ。そして、おそらくは、ぼろぼろに自分を見失うことだろう。そうなのだ、どこへ行こうが、あの子には「里の滋味」をとどけてやろう。

なんだたって「おらちのかあちゃ」が生まれた高田はさ、ぴかりぴかり、いのちの明滅する町……。ねや!



シリーズ
上越後のかたち
「上越学」への試み

【国都】を探せ
謎の越後国府

小島幸雄

三方を穏やかな山並みに囲まれ、北に海を望む頸城の地は、どの分野の歴史を掘り起こしても、山海の豊かな恵みに与り、交通の要路であり、越後の国の都に相応しい地であったという思いを深くせざるを得ません。しかし、この「頸城（久比岐）」には「なぜ」あるいは「謎」が多すぎます。

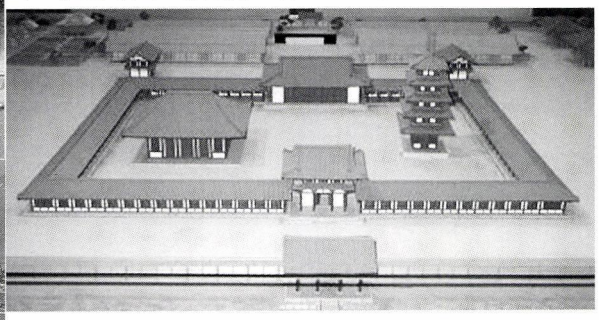
その「なぜ」「謎」に迫り、明らかにしていくことこそが、わが上越の未来への展望を切り拓く「学」ではないかと思います。

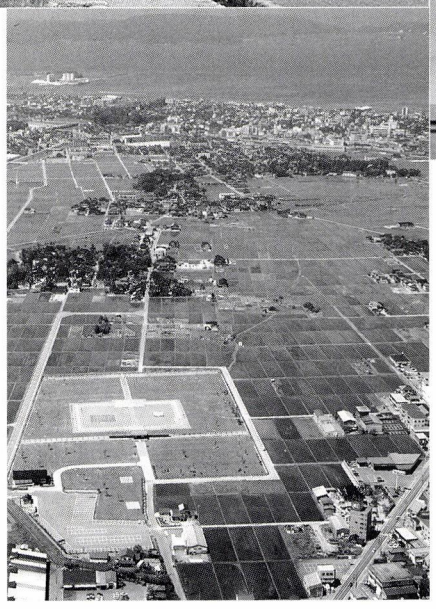


航空写真　第二次大戦の終戦直後に米軍によって撮影されたもので、関川・矢代川・櫛池川の様子がよく分かる。
イラスト　平安京・古代の都市計画と建築／草思社より。



左　復元された能登国分寺南門と塀
下　能登国分寺の推定復元（能登国分寺展示館）





発掘された能登国分寺跡（能登国分寺展示館パンフレットより）七尾の市街の先に七尾湾が見える。

「国都」の意味

平成六年、長岡市に滞在中の立教大学教授（当時）藤木久志先生を訪ねました。上越市史の監修をお願いするためでした。我々の思いは届きませんでしたが、多くの教示を得て帰路に着きました。今でも鮮明に記憶しているのは、先生の、

上越市は全県で唯一の「国都」です。「国都」の歴史を市民の皆さんに伝えるような市史をつくってください。

という激励の言葉でした。先生は、その後発足した市史の準備委員会には参加していただき、十年に及んだ市史編さん事業の礎を築いていただきました。

「国都」とは字のとおり、国の都、すなわち古代に全国六八国の国府が置かれていたところをさします。隣の富山県高岡市は越中国府、和倉温泉でよく知られる石川県七尾市には能登国府が置かれていました。また、加賀国府は石川県小松市、福井県は越前国府が武生市に、若狭国府は「ちりとてちん」や「鯖街道」で全国に知られる小浜市にあったのです。いずれも、今の県庁所在地ではありません。全国的に見ても、古代の国府と現代の都府県庁所在地が同じというのは稀なのです。

「謎」の越後国府

越後国は、当初阿賀野川から北にあったと考えられています。その後、越中国の四郡を越後国に編入し、その時、頸城郡も越後国となりました。さらに、和銅五年（七一二）に出羽国を置いたことによって、現在の佐渡を除く新潟県が越後国として完成したのです。

越後国府が新潟県の中頸城郡国府村（現市内五智付近）に在ったとしたのは、明治に刊行された『大日本地名辞書』とされています。著者の吉田東伍は、中頸城郡に国府村があったことから、この地を古代越後国府の所在地であるとし、同書のなかで、一昨年話題となった「東大寺領石井荘」を名立であるとも記しています。この説は、国府村という地名と重

＊藤木久志　新潟県生れ　専門は日本中世史



五智国分寺
永禄５年(1562)、上杉謙信によって真言宗で再興され、慶長19年(1614)僧俊海によって天台宗に改宗されている。天保12年(1841)に再建されている本堂は昭和63年に焼失したが、平成９年に再建された。三重塔は安政３年(1856)着工のまま未完ながら県の文化財。境内全体が土塁で囲まれており、豪族の館などの跡地を想像させる。



国府交差点（国府3丁目）国道8号線と加賀街道（北国街道）の交差点に「国府」の地名を残す。

なっていたこともあり、何の疑問もなく受け入れられていました。

私が上越市教育委員会に採用になった昭和五二年に至っても吉田博士の説が踏襲されていて、多くの書物が吉田説を拠り所としていたのはもちろん、郷土史家も直江津が越後国府の所在地であるとしていました。

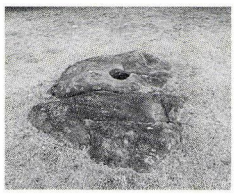
ところで、昭和四八年に刊行された『新井市史（上巻）』に興味深い一項があったことは、その当時、ほとんど誰も口にしてはいませんでした。記憶にある限り、平野団三先生くらいではないでしょうか。その〈興味深い一項〉とは、同書の古代の項で、執筆者の加藤晋平先生が「越後国分寺は上越市の三郷地区にあった可能性が高い」と述べていたことです。

なぜ、直江津にこだわるのだろう？　それが、私の疑問でもありました。さらに、「五智国分寺」の存在が古代国府の〈謎を深める〉のに一役買ったことも否めません。

古代史の「三点セット」

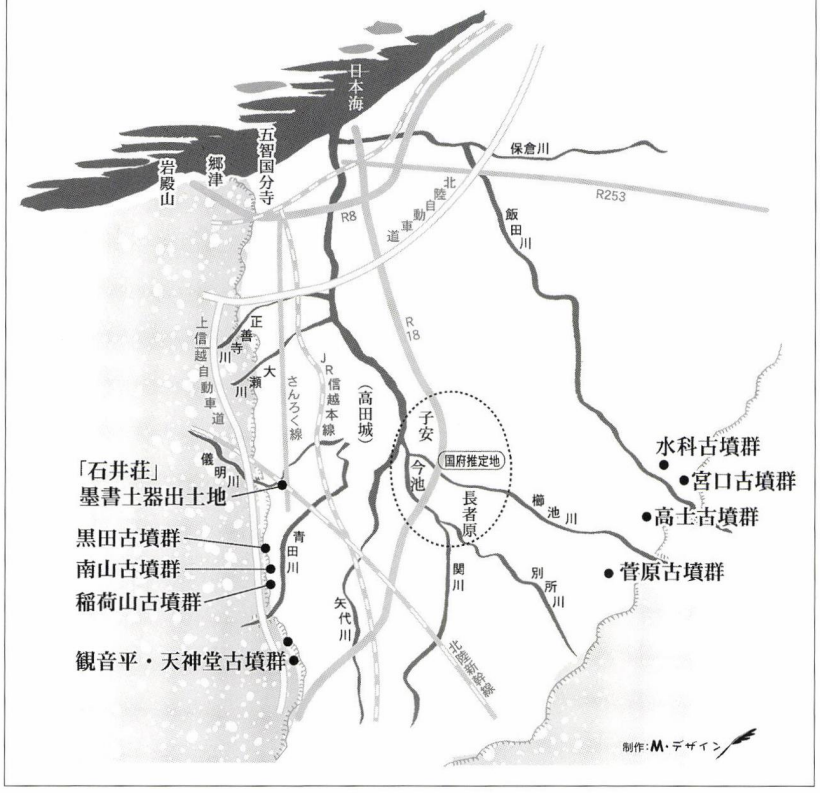
古代史の基本セットは、「国府・国分寺・国分尼寺」の三つです。これらの遺跡が、古代国府の謎解きをする鍵となるのです。したがって、国分寺が歴然として存在している直江津は、当時の歴史認識から言えば、当然越後国府とするに相応しい土地であったのです。問題を複雑にしたのはそればかりではありません。「五智国分寺」は上杉謙信によって永禄五年（一五六二）に再興されたとするに及んで、新たな認識を寄せ付けない理論武装がなされてきたのです。上杉謙信は上越人の心の拠り所です。その謙信が国分寺を再興していたということは、地域の宝がダブルで存在するということを示しているのであって、何物にも替え難い存在だったと思われます。そのことが、古代史は「三点セット」であることを不透明にし、本来の古代越後国府を見えなくしてしまったのでしょう。

佐渡国分寺跡
塔心礎の石



＊平野団三　上越市長岡生れ　上越地域の仏像文化財研究の先駆者／加藤晋平　元国學院大学教授　専門は考古学

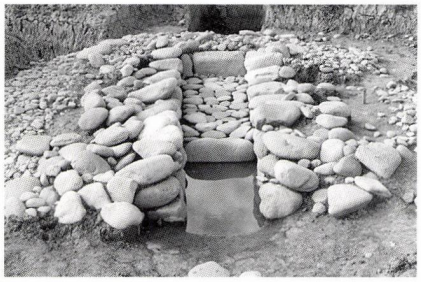
高田平野に注ぎ込む河川と古墳の分布



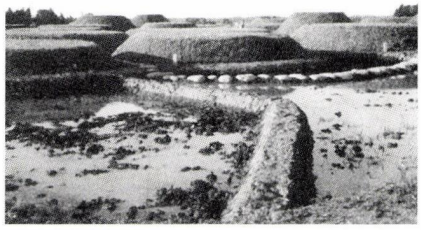
平野の東西にある河川の扇状地に古墳群が分布しているのがよくわかる。
扇状地は関川左岸(西)より右岸(東)の発達が著しく、生産力の差ははっきりしている。

黒田古墳群
上信越自動車道の工事に伴って発掘。直径30mの古墳を含む20数基が発見された。山の斜面を巧みに利用し、石室を作らない方法がとられている。





水科古墳群で発掘され石室。



水科古墳群(国史跡)
昭和50年、圃場整備によって発掘されたもので、34基の古墳が確認された。なかには石室が幅30cm、長さ1m余の珍しいミニ古墳もある。

古墳が群集する北端の地

少し時代をさかのぼって、古墳時代の上越地域に目を向けてみましょう。

上越地域には、古墳時代全時期の古墳が知られています。前期や中期の古墳は高田平野西側の青田川扇状地周辺に分布し、後期のものは平野東側の飯田川と櫛池川扇状地の奥まった地域に集中する傾向が見られます。

県内に目を移すと、前期の古墳が分布する地域と中期の古墳が分布する地域には違いが見られ、約四〇〇年に及ぶといわれる古墳時代をとおして古墳が造られていたのは、高田平野が唯一であることがわかっています。特に、三和区水科から牧区の宮口を経て清里区菅原に至る一帯には二百基以上の古墳時代後期群集墳が存在し、日本海側では北限の古墳密集地として全国に知られているのです。水科と宮口の古墳群は、北限の群集墳として国の史跡に指定されるほど、貴重な文化遺産なのです。



菅原古墳群
岡嶺丘陵の東斜面に100基を超える古墳が確認されている。そのひとつ「菅原古墳」は唯一前方後円墳として県史跡に指定されている。





宮口古墳群（国史跡）
水科古墳と同様に圃場整備で31基の古墳が発掘されている。出土品は史跡公園内の郷土資料館で見ることができる。

日本海と信州・東海を結ぶ要衝

では、なぜ高田平野に多くの古墳が造られていたのかを考えてみましょう。

その答えは、高田平野が日本海と信州を結ぶ交通の要衝であったからだと考えられているからです。前にも記したように、前期や中期の古墳が平野西側に集中しているのは、北陸から信州に至る際に関川を渡らずに南下できたからでしょう。山が文化の分水嶺といわれて境界となったように、川も人の往来に大きな影響を与えていたと考えられます。わざわざ、危険を冒してまで関川を渡らなくても、南下できる道を選択したのでしょう。もう一点は、東側の飯田川・櫛池川扇状地が未発達であったことも考えられます。約一五〇〇年前の古墳時代中期には、未だ扇状地が安定せずに氾濫源の状況であったことも想定してよいかもしれません。

その後、古墳時代後期になると高田平野の状況は一変します。平野東の扇状地の奥に二百基以上に及ぶ古墳が造られるようになるのです。古墳をたくさん造れるということは、生産力の拡大と富の集積が容易に推測されます。古墳を造って葬られ、権威の象徴として周囲に誇示することができる集団がいたことを物語っています。平野西側の前期や中期の古墳群が一群で二〇から三〇基と考えられていますから、十倍かそれ以上の古墳が造られたことになります。年代も極めて短時間であり、一〇〇年に満たないものであったでしょう。短期間に極めて多くの古墳を造るということは、言い換えれば生産力の爆発的な向上があったということになるでしょう。

その力の背景には、高田平野が北陸ルート、信州・東海ルート、二つの流通系統を結ぶ要衝という地域の特性があったと思われます。

古墳時代から古代へ

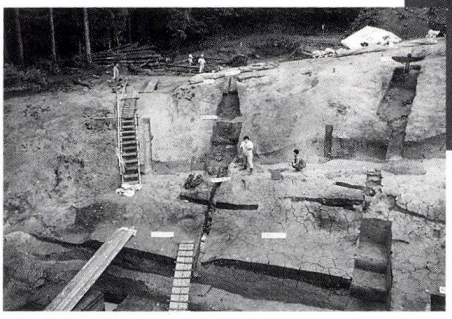
このような後期群集墳の集中は、富の蓄積であるとしましたが、それと同時に、当時の王権、大和の王権との関係もあったことが推測されます。そして、後に成立する古代王権につながり、古代越後国府が成立する基になっていったのではないかと考えられます。

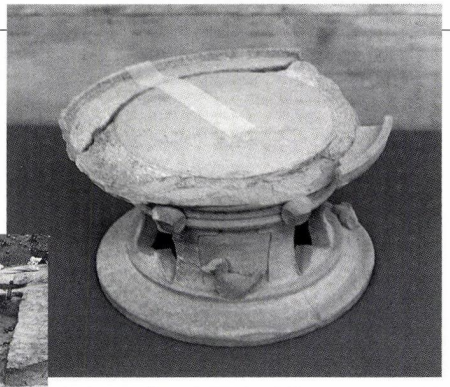
したがって、現在古代越後国府の最も有力な候補地とされる三郷地区は、突然古代の国府に名乗りを上げたのではなく、古墳時代から続く富の集積地としての扇状地が背景に



岩ノ原遺跡
北陸新幹線工事で調査され、「石井庄」と読める墨書土器が出土し、「東大寺領石井荘」との関連が注目されている。（写真・新潟県埋蔵文化財調査事業団）

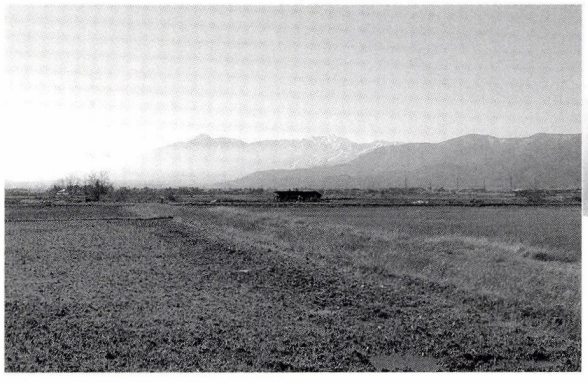
滝寺古窯跡
上信越自動車道の工事によって発掘調査された。

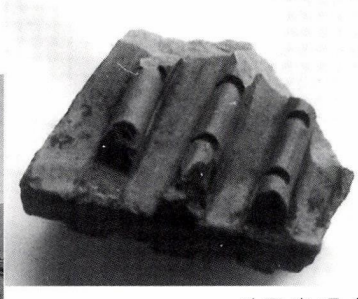




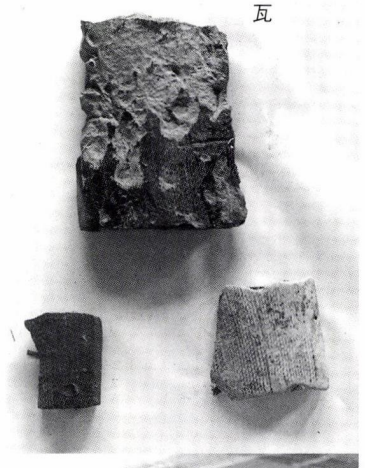
出土した「円面硯」と呼ばれる須恵器の硯は、役所や貴族が使用したものである。

国府や国分寺があったと考えられている長者原の景観





瓦塔（がとう）



瓦

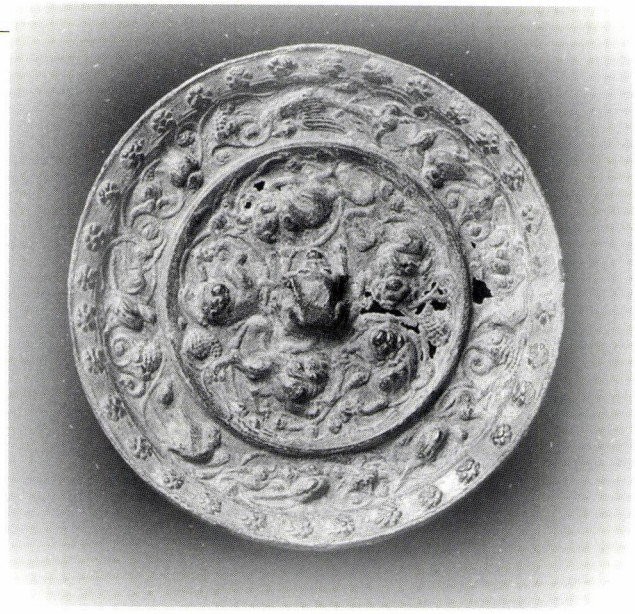
今池遺跡
昭和57年、上新バイパス（国道18号）の工事のために調査され、向橋で焼かれた瓦や円面硯、瓦塔と呼ばれる焼き物の塔片などが出土した。



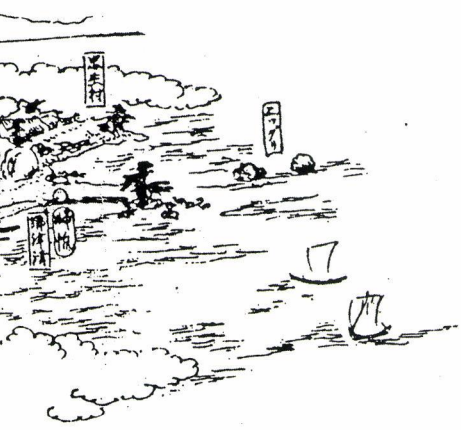
出土品の数々

あったことによるものと思われるのです。

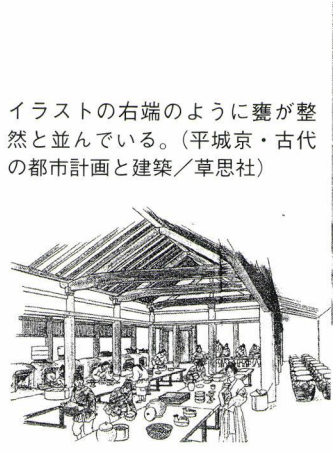
私は、もう一点に着目しています。それは港です。三郷地区の今池周辺は、関川と矢代川の合流点であり、河川の水量が確保されていました。現在は、上水道や農業用水で取水され、どの河川も本来の水量ではありませんが、かつては相当の水量があったものと推測されます。その河川を利用した水運によって、遠く京と物資の流通があったと考えているのです。港とは言っても関川に港があったのではありません。港は別の場所、おそらく郷津辺りがその機能を有していたと考えられるのです。国府が関川に面していたのは、郷津で外洋船から物資を艀に移し、関川を溯って運ぶためだったと思われます。前述の石井荘と書かれた墨書が見つかった向橋の岩野原遺跡



海獣葡萄鏡（写真・上越市教育委員会）
平成6年、子安遺跡の溝跡から出土。中央に獅子がうずくまり紐を通すようになっており、海獣を取り囲むようにして葡萄唐草文が配されている。大陸から直接もたらされた鏡の一枚で、直径14・2㎝、国内で4番めの大きさ。



も儀明川に面していて、舟によって物資を運搬するために造られた集積場と考えられるのです。儀明川を下り、さらに関川を利用して物資を日本海まで、言い換えれば郷津まで運んだのではないでしょうか。三郷地区に隣接する子安遺跡では海獣葡萄鏡が出土しています。この鏡は、海上交通との関係が想定されていて、出土地も今池から続く川の跡からと、興味の尽きない鏡なのです（現在の櫛池川は平安時代より後に掘られた）。



イラストの右端のように甕が整然と並んでいる。（平城京・古代の都市計画と建築／草思社）

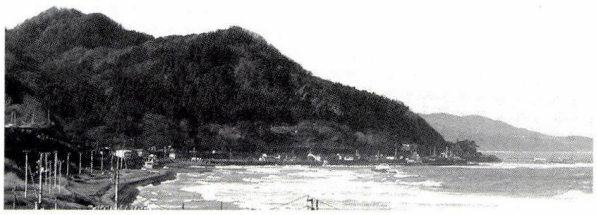


設置甕
平成17年に子安遺跡から出土したもの。甕が転倒しないように穴を掘って据付ける甕のことで、貴族の屋敷や役所の調理場に見られる。

なぜ、直江津が古代国府ではないのか

古代の国府は、一定の基準を基に都市計画されていました。全国に置かれた古代の国は、大・上・中・小の四段階に分けられ、越後国は上国とされていました。これまでの研究によると、上国では一辺約一キロメートルの平坦な土地に街が造られたことがわかっています。さらに、古代国府は政庁と町並みばかりではなく、国分寺や国分尼寺、そして国府にさまざまな物資を供給する施設が必要です。それを考えると、砂丘の後背湿地をかかえる直江津は、奈良時代に百町歩を超える平坦な土地があったとは到底考えられず、古代国府を想定するには無理があるのです。

遺跡から見てみましょう。直江津にある遺跡はそのほとんどが中世以降のもので、奈良・平安時代の遺跡は数えるほどです。それに対して、三郷地区には古代の遺跡が数多く知られ、その規模も県内では有数のものなのです。発掘された遺跡は多くはありませんが、他とは比較にならないほど密集していたことがわかっています。



山上に大日如来を祀る岩殿山と郷津湾
京都相国寺の歌僧・万里集九が「梅花無尽蔵」で詠った五智国分寺の「堂宇は山の如く海涯に冠たり」という眺めは岩殿山か。





大日如来坐像（国重文）（写真・上越市教育委員会）
岩殿山で親しまれている大日堂に安置され、真言密教の金剛界の印を結ぶ大日如来。平安時代後期の作で、都で製作されたと考えられている。国府の移動や謙信による五智国分寺の再興の謎を解く重要な鍵を握る。

直江津がなぜ国府になったのか

結論は簡単です。港があったからです。古代越後国府が川に面していたことは前述しましたが、平安時代後期になると日本海側を青森や北海道まで流通する焼き物が出現します。珠洲焼と言われるもので、能登半島の珠洲市周辺で生産されていました。これらの流通にかかわる権益を獲得するために、港に近い土地に国府を移動させたのではないかと考えられます。その時、都市計画を完璧にやり直し、直江津に国府が移ってきたのではないかと思います。

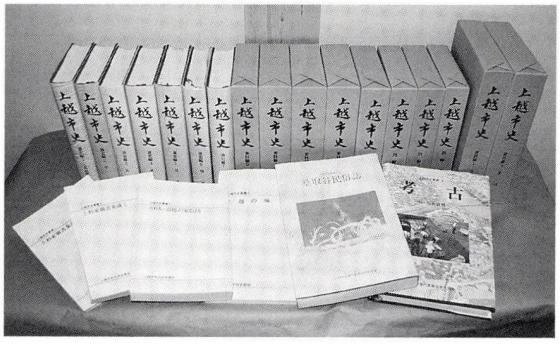
郷津を見下ろす岩殿山に「大日如来坐像」が残されているのもこの間の経緯を示しています。また、「大日如来坐像」の安置されている場所は大字五智国分であり、近年五智国分寺の旧地であることが指摘されています。一〇年ほど前、岩殿山で十二世紀後半の珠洲焼が出土していることが確認され、雛壇のような平坦地が続く東斜面が平安時代の寺院の跡であろうとされています。

このように、越後国府は奈良時代に高田平野の中央部で都市計画され、日本海の物流という大きな権益を求めて直江津に移動してきたものであることが推測されるのです。

さらに、福島城から高田城へ政治機能が移り、直江津には地名としてのみ〈国府〉が残されていったのでしょう。

■元上越市教育委員会学芸員

10年におよぶ、「国都」のありようを探る「上越市史」の編さん事業は、本編21巻、叢書9冊、市史研究11冊と、市町村史としては異例の大部となった。



この冬 カメラの眼

ライトアップされたレルヒ像





*



*

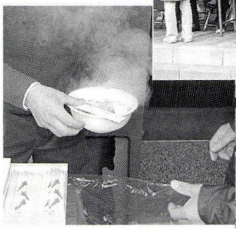
レルヒの指導を再現しようと始められた「一本杖スキー」もすっかり定着



*







本町通りではスキー汁やアンコウ鍋も登場



本町商店街のPRパンフレットを配る大手町小の子どもたち



*



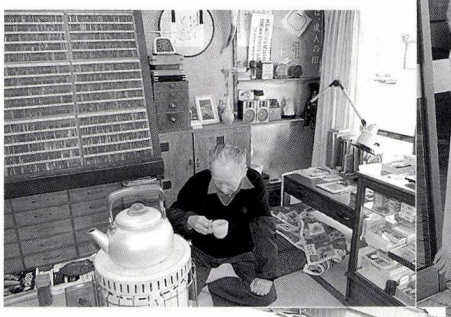
レルヒ祭 レルヒウィーク



レルヒ祭に合わせて「バスでECO交通」ワークショップの企画で、低公害・小型ノンステップバスが本町通りを走る

＊は撮影・大田均さん

あわゆき道中











4回めを迎えた「あわゆき道中」
まちを歩いていると、活字ケースを今も残す店に出会うことも







中ノ俣を守る「たきび会」の人たちで再現される「大持引」（NPOかみえちご山里ファン倶楽部の協力がある）

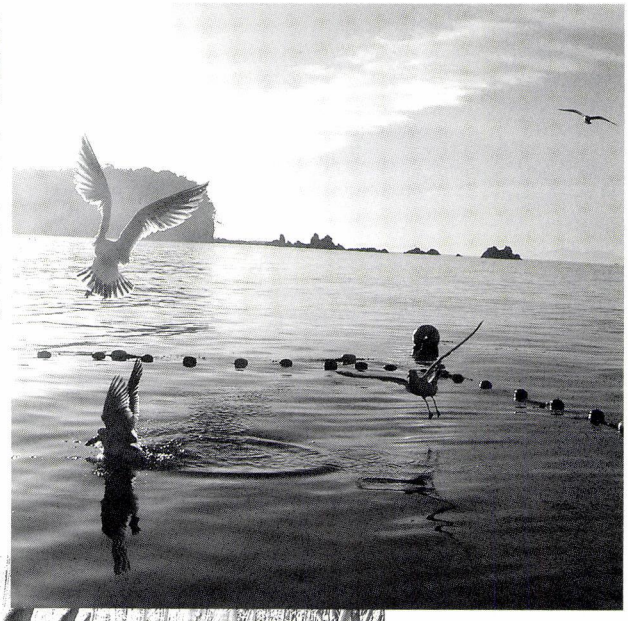
大持引（だいもちひき）

小木から始める佐渡の旅――。

小木航路旅情編

■NPO法人　木と遊ぶ研究所理事長　関原　剛

小木航路の減便が決定され、ますます遠くなる佐渡ヶ島、そして小木。対岸の上越から長年にわたって佐渡と関わり続けてきた、NPO法人木と遊ぶ研究所の関原剛氏に、佐渡・小木との出会いと、その魅力について書いていただいた。



定置網漁　カモメもおこぼれが

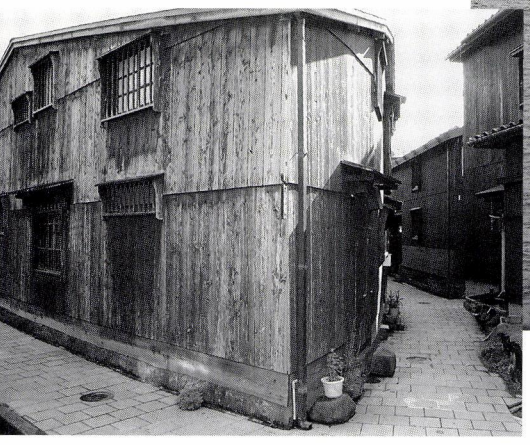


岩屋観音



直江津港へ向かう「こさど丸」とすれ違う

宿根木



佐渡との付き合いは、もう七年になる。上越で木工職人養成の寄宿学校が出来ないかと思っていたところ、鼓童財団の研修生制度を知り、視察をお願いしたのが始まりである。

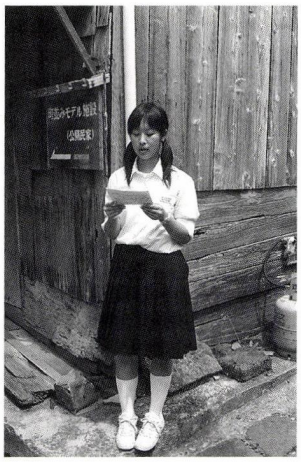
そのころは鼓童の演奏すら聞いたこともなく、すこし怪しい団体くらいに思っていた。その日が来て小木港の階段を降りると、人のよさそうな中年（失礼）がいた。どうみても太鼓を叩けそうにはない。「ああ事務の暇な人だな」、そう思って彼の車に乗り、いろいろ案内してもらった。彼は「青木」と名乗った。随分案内させた後になって、「で、青木さんは事務局ですか？」「はい、事務局長です」「へ？局長？」「局長です」。この人こそ、現在の鼓童代表青木孝夫そのひとであった。

そのころ鼓童は森を取得し、森の手入れや活用を模索していた。私はたまたま上越で森林ＮＰＯをやっており、両者の興味は急接近し、以来無数に佐渡へ渡ることになり、今では鼓童財団評議委員に。そして、鼓童の森の調査、佐渡鬼太鼓の森づくりの企画、佐渡杉を使った家具産業の立ち上げなど、今やよろず手伝いの様相で、佐渡との縁は深まるばかりだ。

そのなかで最近、鼓童財団の依頼を受け、落ち込む一方の「佐渡への修学旅行」をなんとかするための総合調査を行った。そこで分かったことだが、上越の小学校の先生、体験学習の受け入れ側、佐渡の宿、みんな「これじゃいけない」と思っていることである。

しかし私は楽観的である。なぜならば「問題アリ」と、問われたのは手法であって、行く側も受け入れる側も佐渡の魅力に関しては一致している。

「手垢の付いた観光資源」しか見ないのがいけないのであって、佐渡そのものの地力をもってすれば、きっと「新たな資源」はざくざく出るだろう。なんといっても佐渡は宝の島なのだ。


夏休みに宿根木で案内ボランティアを行う小木中学の生徒

島の響き 佐渡へ 残

佐渡はおぼろで、不思議である。

一度いかぬ馬鹿、二度いく馬鹿。あるいは草木もなびく島。宝の島。流人の島。

上越市桑取谷の鳥追い歌では、歌で殺した害鳥を流す島でもある。

そして、鳥追いに追われたその鳥は、朱鷺であった。

鳥追い歌が望んだ通り、朱鷺は追われて佐渡へゆき、そして消えていった。

遠い他県はおろか、この越後においてさえ、佐渡はさまざまに語られはするが、その実体は依然おぼろであり、茫漠としている。

その佐渡へ、初めて行ったのが四十の時であった。

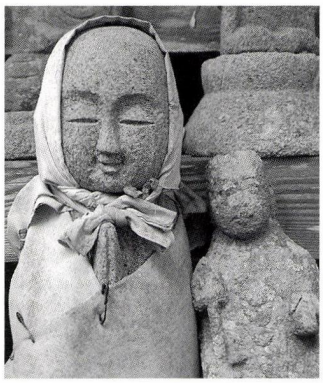
いつも、水平線の向こうに眺めただけの島影に、はじめて上陸したのである。

それまで、私の佐渡のイメージは「トキノウキンザンタライブネ」というレッテルでしかなく、その、まことに貧弱なイメージのおかげで、私は長い間、この真秀場（まほろば）の島を、見過ごしてきたのである。

それ以来七年間、今度は無数に佐渡へ渡ることとなった。

観光ではなく、仕事で行くものだから、観光地らしいところには行かず、空いた時間で、そこいら辺の路地や畦道を歩き、あるいは寺や神社を覗くのである。しかしそのおかげで、観光地の空々しい佐渡ではなく、生きた佐渡に出会うこととなった。そのような生きた佐渡は、パンフレットの写真やビデオ広告などでは到底味わえない、なんとも深い面影を見せるのである。

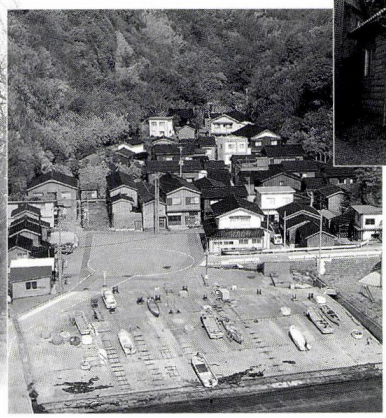
佐渡では、神や仏との距離がない。神や仏が臨在する気配を、私は幾度も佐渡の路傍に感じた。石ひとつ、田ひとつ、森ひとつ、荒磯の巌ひとつ。それぞれに、神も仏もおわすのである。

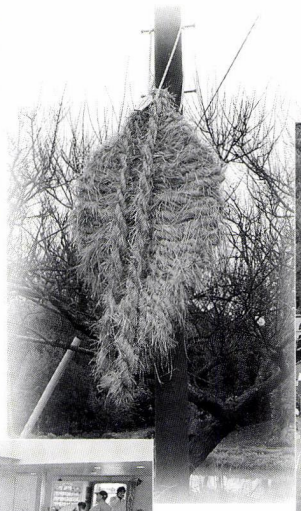

蓮華峰寺の石仏



宿根木

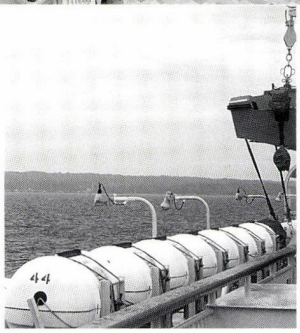
深浦集落




倉谷集落にある疫病・魔よけのおおわらじ

乗船客でいっぱいの「こがね丸」





佐渡宿根木地区には時宗の家が多い。時宗が多いというのは、なかなかに珍しいのである。時宗は、捨て聖と呼ばれた一遍に始まり、南無阿弥陀仏の六字名号を、ただただ唱えて遊行流浪するのである。この集落に時宗が多いのなら、こここの家並みや石畳も、きっと遊行の南無阿弥陀仏を聞いたのだろう。そしていま、それら無数の人々が唱えた念仏が、路地の奥からこだましてくるように、波や風が鳴り響く。それは今、ここに暮らす人々が、生きた仏に対して、生きた祈りをあげているからに他ならない。その祈りの残響が、幻のこだまとなって響くのである。そのような生きた祈りの証拠に、佐渡では、どのような路地裏の石仏の花であっても、それらはいつも真新しいのである。

夕方に時間が空くと、私は小木の定宿近くにある、洞窟のなかの観音堂あたりを、ふらりと散歩する。すると不思議なことに、必ず「講」の日に当たるのである。

「講」の日は、近郊の善男善女（といっても年寄りばかりだが）が集まって、経をあげ、持ち寄ったものを食べて歓談する。ふらりと立ち寄った私にも、わけへだてなく、焼餅をくれて歓待してくれる。そして、おばあさんは、私に縁について語ってくれるのである。

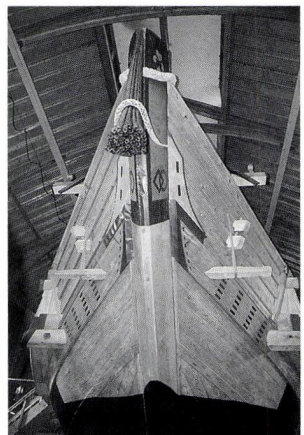
今日ここに私が来たのは縁によって決まっていたことなのであり、それは仏がくれた、ご縁であると。

「あんたのご先祖が、信心深いかただったので、ご縁をもらったんですよ」

おばあさんが笑いながら教えてくれる、そのような生きた祈りの言葉が、どれほど無味乾燥な私を救ってくれたことだろう。縁（えにし）をかわせる旅こそが、至上の旅であるのは、言うまでもない。

ここは観音堂とは言うものの、実際には、ありとあらゆる仏や神が、混沌のまま祭られている。三十三の菩薩や明王、十王や閻魔、地蔵菩薩、如意輪観音。しかし本来、これがもっとも単純で純粋な祈りのかたちであって、それを混沌とはいえないのである。生きた神

北前船



や、生きた仏に、よろず祈ればこうなるのである。むしろ神や仏を整然と区分した祭壇のほうが、冷たく、無味乾燥に見える。

おばあさんにお礼を言って外に出ると、陽はもう西にある。山の端の小道には、藪ツバキの大木がならんでいる。無造作に落ちた赤い花が、道一面に散っている。それを夕日が照らすのである。それは越後のひとが慣れ親しんだ、雪ツバキのつつましさとはちがって、大きく隆々としたツバキなのだ。かつては実を拾い、油を搾ったそうであるが、いまはひっそりと咲き、散ってゆく。

佐渡にもハレとケがある。鬼太鼓やアースセレブレーションはハレの日である。それはとても素晴らしいのだが、それら「祭りの残響」が残る、ケの日常の中にこそ、佐渡の深ぶかしい面影が現れ出るのである。私は佐渡に「残響」を聞きにゆく。連綿と続く、生きた歴史や、今の暮らしの中の祈りや、夕凪の船影や、路傍の仏にささげた花。

実に佐渡は、それらの「残響」に溢れている。佐渡への旅人は、ケの日常を目指すのがよい。そして残響に耳を澄ますのである。

きっと夕餉前に、一人のおばあさんが路傍の石仏に、自分の畑の花を生けるだろう。そして、その三十分後、たまたま通りがかった私が、その花を見るのである。

そのような気配の残響が、なににもまして佐渡を不思議にしてゆく。やはり佐渡は、知れば知るほど、おぼろなのである。





上の写真は修復されて金色に輝く陀羅尼大仏
右は修復前の大仏

大仏の引越し

北本町の曹洞宗国厳寺（こくごんじ）が道路の新設のため、寺町の常敬寺裏の大貫に移転した。

その国厳寺に安置される「盧遮那仏」は「高田に大きなもの」のひとつに数えられ、通称「陀羅尼大仏」と呼ばれて親しまれてきた。永禄２年（1559）、旅の僧が水害に苦しむ人々を見て、「陀羅尼」を唱えて救ったことから「波除陀羅尼塚」が築かれ、大仏を造立したのが始まりと寺に伝えられている。

宝永５年（1708年）当時の仏像は、10.２ｍもあったといわれているが、幾度かの焼失後、明治15年に高田の仏師吉岡慶作らによって「丈六」つまり一丈六尺（16尺・約4.84ｍ）の大仏が復興された。

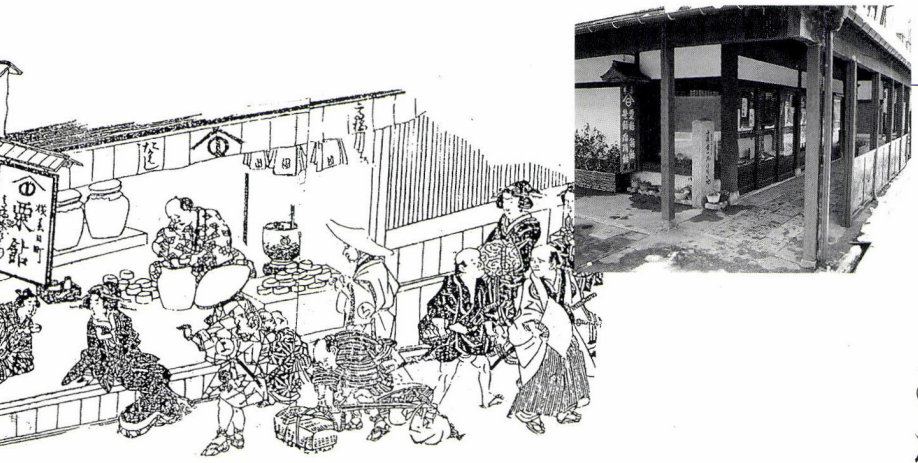
手の形は、東大寺に見るような「盧遮那仏」の印ではなく、なぜか密教の「胎蔵界大日如来」の印を結び、宝冠には「五智如来」が飾られいてる。

そのような詮索はともかく、移転に当たって解体修理され、造立当時の金色に輝く有難いお姿に戻った。

写真は１月の撮影で、光背も付いていないが、美しいお姿である。花のころには落慶法要も行われる。近くに寺町駐車場もあるので、寺町散策とともに、ぜひお参りしてほしい。

文学の旅

黒井・直江津・高田・有間川・名立



賑わう飴やの店先（金草鞋）

十返舎一九 ぬれ手に粟…「金草鞋（かねのわらじ）」の旅

弥次喜多珍道中で有名な『東海道中膝栗毛』の作者、十返舎一九の『方言修行金草鞋（むだかねのわらじ）』の八編と十八編が上越教育大学の先生方によって現代語に訳されて本になっている。

『金草鞋』は、高田の粟飴を一躍有名にしたことでも知られているが、編者の下西先生は、一九は文化十二年（一八一五）、文政元年（一八一八）、文政九年（一八二六）の三度にわたって高田を訪れたと言っている。そして一九、五十歳の一回目の旅は、江戸・善光寺・高田・新潟・会津と旅を進めるが、翌々年に発表される『金草鞋』第八編「越後路之旅」では、千久羅坊（ちくらぼう）と下手（へた）の横好（よこずき）にその逆コースを歩かせているとも述べている。

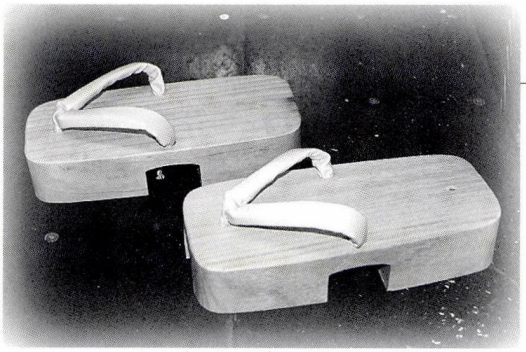
その理由も述べられているが、土地の者としては、下（しも）へ向かう旅は、なんとなく「通り過ぎている」ようで寂しい。芭蕉の『奥の細道』も逆コースだったらどうだろうと思う。

三回目の文政九年の旅は、三年後『金草鞋』第十八編「越中立山参詣紀行」として、こんどは特定の旅人は登場しないが、高田から書き継いで越中へ向かっている。

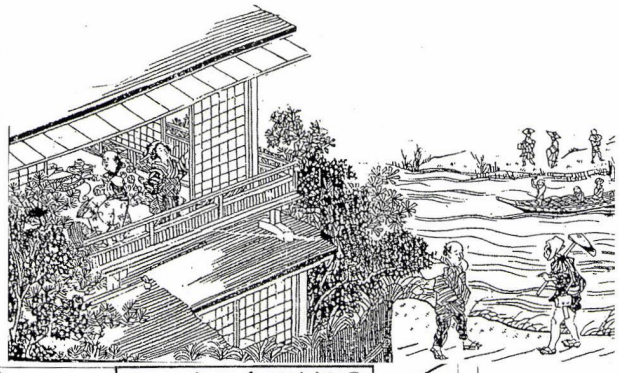
「越後路之旅」の道をたどってみると、会津を発った二人は「順調」に旅を続け、米山峠を越えて鉢崎から柿崎に入っている。

柿崎では「川越の名号」の話を聞き、椿屋という旅籠に泊まっている。翌日、浜道の砂に難渋し、歯のない浜下駄に感心しながら黒井の宿を過ぎ、春日新田宿から「渡しを越ゆれば今町というにぎわしき町に至る。この所、船付（ふなつき）にて遊女あり。いたって繁盛の所なり」と今町を未練たっぷりに通過している。上下のいずれかの「渡し」を渡ったのであろう。今町道を「右の方に春日山とて謙信の城址（あと）」を見ながら高田へ向かう。高田の手前の宮野門左衛門という茶屋で休んでいるが、追分か土橋あたりであろうか。

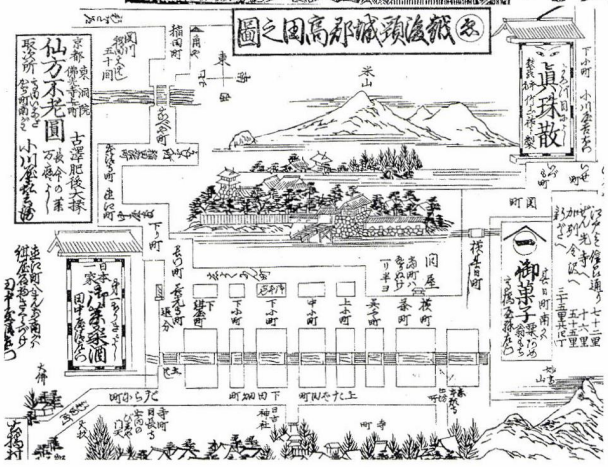
そして、「当国一の御城下にて繁盛の所な



千久羅坊と下手の横好が興味を示した「浜下駄」



二人が未練を残して通った今町（金草鞋）



会員制旅ガイドブック「東講商人鑑」に見える高田の城下図
一九が逗留した40年後の安政2年ころの姿

り」という高田に着き、石灰屋という宿に泊まる。この石灰屋がどのような旅籠であったかは分からないが、柿崎での宿、椿屋は「本陣」という看板が出ているので、高田もそれなりの宿をとっているのであろう。

いよいよ横春日の粟飴の高橋家を訪ね、粟にて製したる水飴、いたって上品にて風味よく、この所の名物なり。

評判は高田の町に年を経て
　豊かに澄める水飴の見世

ここの粟飴を食うと、手に粟をつかむように、うまい事ばかりあって、身代が飴のようにだんだん伸びる

と賞賛し、また「この所、肴は新しく沢山にて酒も佳し、幾日も逗留したりとも飽かざる所」と絶賛しているので、よほど歓待を受けたものと思われる。

次いで、十八編の「立山紀行」は、江戸からの道中を省いて、高田から書き始め、町のはずれに追分、右の方は新潟道（今町道）左は越中（加賀）街道也。春日山、城址あり。

そして中屋敷を過ぎて五智を参拝し、

五智如来、華蔵院という。昔、聖武帝の勅願所なり。寺領二百石あり。

と書いている。

乙（きのと）の大日、五智山の巽（たつみ）にあり。如意山乙宝寺（おっぽうじ）という。よき景致なり。

これは岩殿山の大日如来ことか。

御仏の後光と照るや春の日の
　霞がくれに見ゆる五智山

と詠んでいると、母親をあちこち参詣の旅に連れ歩く孝行息子とすれ違う。二人は高田の石灰屋で泊まろうと話し合っている。

五智から浜道を行き、有間川では、

沢山にいつも肴は有間川
　たえず霞の網引く春

名立の岡崎新右衛門の宿に泊まり、

花見鯛とれる頃とて旅籠屋の
　平椀にも見ゆる蛸の桜煮

と桜煮を賞味して、翌日は越中へと旅立っている。

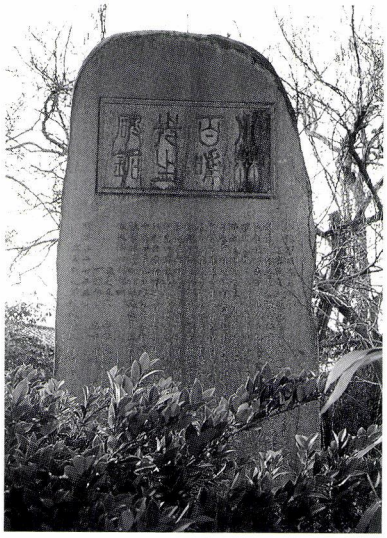
参考『金草鞋』「越後路紀行」「越中立山参詣紀行」郷土出版刊。（読みは本書に従った）／『新潟県文学散歩』／『頸城文学散歩』

この人に学べ



直江津今町が生んだ偉大な数学者

小林百哺



五智国分寺境内にある小林百哺の顕彰碑

小林百哺は、幕末から明治にかけて直江津の新町通りに居を構え、牙籌堂（がちゅうどう）という塾を開き、多くの門人を教えた数学（和算）、天文、測量、暦、陰陽道の学者であった。

地租改正に伴う土地測量で、上越地域の測量が支障なく行なわれたのは、従事した者のほとんどが百哺の門人あるいはその弟子であり、彼等の技術力の高さによるものだといわれている。

その門人は、百哺の生涯において五千人を数えたといわれている。横浜開港の測量に携わった高田藩士（脱藩）林百郎、弘化元年に十三歳で信濃から入門した三井斧吉のように飯山藩の勘定役になった者もいる。

一方で町の人達には、「牙籌」つまり「そろばんの塾の先生として親しまれていた。

百哺、通称祐吉は現上越市の小猿屋に生まれた。生年は文化元年（一八〇四）といわれている。子どものころから学問をよくし、ことに数学に秀で、直江津今町の数学者高良鴎隣に学び、師亡き後、塾生は十九歳の百哺を師として学んだといわれている。

二三歳で今町の髪床藤八（現柿村書店本社の地）の養子となり、養女よのと結婚した。

百哺は家業を継がず、二八歳の天保元年（一八三〇）、上洛して数学・天文・陰陽道・暦法・測量を学び、同六年、八年と再び上洛、陰陽道宗家土御門家司天官安部晴親から司天家阿部朝臣百哺として越後国天文陰陽目代に任じられ、十四年には四十歳で三度目の上洛、司天官師範代を勤めている。土御門家の免許状を持つ者は帯刀を許されて、公用の旅には土御門家の手形が支給され、先々の宿には先触れが出された。

百哺は一方で蘭学も修めていたため、天保十五年（弘化元年・一八四四）、高田藩は沿岸の海防のため市振から青海川まで台場や遠見

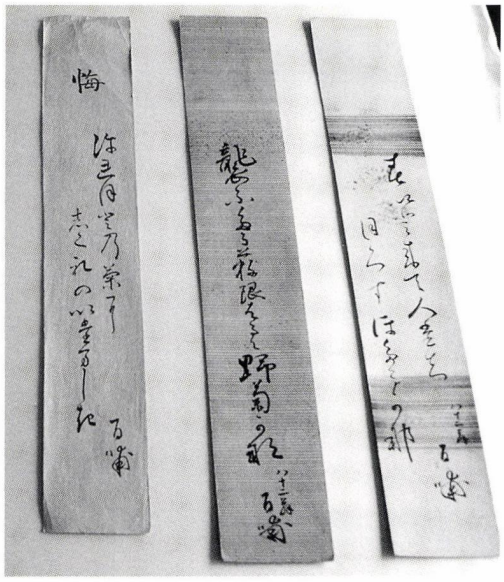
番所を築くにあたって、彼に測量や砲台の設計をさせている。元治元年（一八六四）には藩の「算術測量方」を命じられ、砲術の指南もしている。

慶応元年（一八六五）、幕府の長州征伐の先陣を命ぜられた高田藩主榊原政敬に従って広島まで出陣し、功により廻船入港税を取り立てる運上取立役から大肝煎に次ぐ大年寄格に取り立てられた。

慶応二年（一八六六）藩校修道館の開校に伴って数学の教授となり、明治五年（一八七二）今町校（直江津小学校）の開校にも尽力し、自らも教師となった。

明治十二年、七六歳の老躯をおして上京し旧知を尋ね、また測量機材も購入して帰郷している。

十六年には親不知の国道開削の設計にも携わっているが、二十年一月九日、病を得て八四歳をもって生涯を終った。



百哺自筆の短冊

墓所は初め五智国分寺であったが、後に高田寺町の日蓮宗日朝寺に移っている。

百哺の生涯で忘れてならないのは、蘭学者高野長英を匿ったと言われていることである。天保十年（一八三九）蛮社の獄に連座して江戸伝馬町の獄舎に入牢する長英は、弘化元年（一八四四）、火災に伴う切り離し（決められた日限のうちに戻れば罪が減じられる）にもかかわらず逃亡し、その年の十月、全町内ほとんどを焼失する弘化の大火の復興にあわただしい直江津今町に、密かに百哺を頼って来た。百哺は一計を案じ、大胆にも向かい（現直江津郵便局）の大肝煎福永七兵衛に身柄を預けることにした。福永家は酒造業を営んでおり、いざと言うときには酒樽に匿えばよいと考えたからである。この事実は、「福永家に口伝として伝えられたもの」であると、郷土史家の故渡辺慶一氏が書いている。

なぜ、長英がはるばる百哺を尋ねてきたのであろうか。それは長英の弟子で、幕府天文方筆頭内田五観（太陽暦を制定）の門に、百哺は自らの弟子林百郎を入れるなど、お互いに深い学問の絆で結ばれたネットワークによるものであろうといわれている。

百哺所持の測量機器などは、子孫の方によって東京国立博物館に寄贈されて保管され、昭和五十五年に開催された市立博物館の「百哺展」で一度公開されている。

直江津が生んだ偉大な数学者を顕彰する展観が再び開かれることを願うものである。

参考　「小林百哺」渡辺慶一著　柿村書店

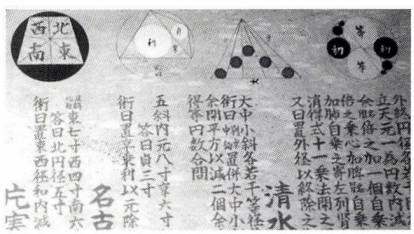
和算とは

日本で独自に発達した数学で、代数や幾何学などの解析では西洋の数学を凌ぐほどであったといわれている。

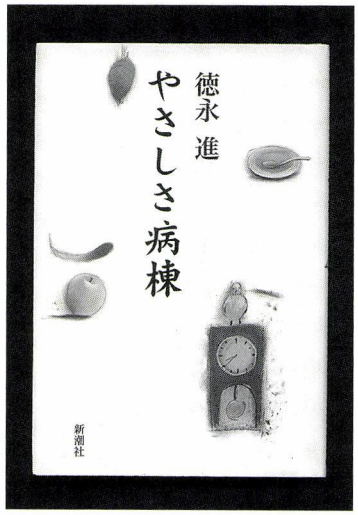
和算には関孝和の関流を代表とするいくつかの流派のように、弟子は段階ごとに免許が与えられ、皆伝を受けた者は内容を口外できないというものであった。また、天文学（暦）や測量学とも深く関連して発達している。

写真は「算額」と呼ばれるもので、難問が解けると神仏の加護に対する礼として、問題と回答を書いた額を寺社に奉納した。後には問題だけ掲げて、それを解いた者が回答を掲げるというように互いに解析の技を競い合うようなこともあった。このような算額は五智国分寺本堂にも二枚掲げられていたが焼失している。

和算は一部の学者だけではなく、江戸時代の一般市民の中に広く普及し、優秀な学者も生まれた。



■読書びと



やさしさ病棟

徳永　進著

新潮社
一四〇〇円（本体）

久方ぶりにＮＨＫの朝の連続ドラマを堪能している。今朝に見た師匠の臨終の風景と弟子達が芸を掴む一瞬の対比のシーンなど、配役や演出の妙もあろうが、かかって藤本有紀の脚本によるところが多い。「落語」というキーワードによって照射された、江戸期はもちろん明治大正の人々の〈生・老・病・死〉への諦念と畏れ。

ドラマで主人公が初めて出逢った「愛宕山」の一席、それを黒門町の師匠の名演で座右に置き、ひょんな縁で弟子筋の噺家と長く同伴してきた私にとって、藤本が織り成す視点は新鮮だった。

闘病中の父親の厭世の呟きをつたえる細君の言葉や、身辺に続く無常の事どもの中にあって、何を信じて今日とそして明日を繋げていくか。

惑う私は、明るさに向かって遥かに先を行く先達の本を書架の隅より選び出して、久方にその直截な言の葉にふれてみた。

そのひとり、徳永進（とくながすすむ）は一九四八年に鳥取県に生まれ、京都大学医学部を卒業、在学中よりハンセン氏病患者の強制隔離問題にかかわる。京都、大阪の病院勤務を経て、鳥取赤十字病院の内科部長に。八二年『死の中の笑み』（ゆみる出版）で、講談社ノンフィクション賞を受賞。その後も『臨床に吹く風』『心のくすり箱』『カルテの向こうに』など、平明な題名に象徴される医療現場からの飾らぬ発信を手渡し続ける。九二年、独自の信念で地域医療をしている人に贈られるという「若月賞」の一回目の受賞者となった。

そして二〇〇一年二月には、より終末期医療に取組むため、鳥取市内にホスピスケアと内科の一般医療を行う十九床全個室の有床診療所「野の花診療所」を開設する。自転車に乗って大好きな往診にいく徳永。野に咲く花のように自分らしく生き、自分らしく死ねる場所を、と医師の志に共鳴する看護師と地域のボランティアに支えられながら精力的な活動を続けている。

多岐に亘る徳永ワールドへの入り口として恰好の『やさしさ病棟』（現在は『ホスピス通りの四季』と改題されて新潮文庫）は、医薬雑誌に五年間連載し一九九八年に上梓された。

徳永はこう吐露する。「医療者にとって患者さんは大切な人ではあるが、やっぱり他人だ。他人にやさしくするって難しい。いや、身内とか他人の区別なく、やさしくするとかやさしいとかいうこと自体がとても難しいことなんだろう。」「ぼくら医療者は、膨化していく〈やさしさ要求物体〉によって押しつぶされそうになり、疲弊する。」それでも現場から、やさしさのオアシスが涸れ上がらないのは、患者とその家族の心の在りように、失ったものを注入してくれる〈やさしさの回路〉が潜んでいるからだ、と。

果てなく続く臨床の毎日で、病む人、看取る人、逝く人との会話を紡いだエッセイ五十五編。病者はみな悪意の腫瘍を内にかかえ、半ばを超える章で臨終の景色が綴られる。告知を機に気力が失せた青年の記憶は切ないが「死ぬくらいで泣かないでよ。」と徳永に言われて悠揚死と向き合った男の貌もある。それでも徳永は残された生の刻限が短いことを患者に語り続ける。

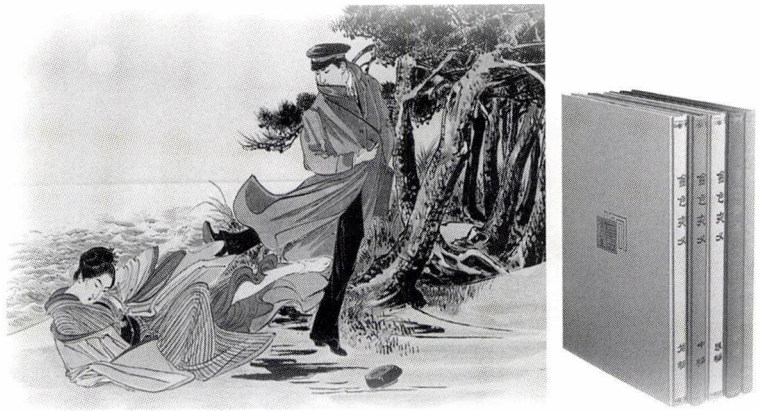
「こんな医者がそばにいてくれたら、笑いながら死ねるだろう」と谷川俊太郎に言わしめた徳永。ドクターコトーが中年になったらこんな駄洒落をいっているかな、と連想させるようなユーモラスで飾らぬ語り口が微苦笑を誘う。

集中のレポートでは、アメリカの終末医療の現場に立って（九八年当時彼の地では二五〇〇箇所のホスピス、対して日本は三十六施設）、目指すものは家族と共に、そして家族に代わっての在宅ホスピスである、という筆者の述懐が胸を打つ。鬼手佛心の医師は徳薄き我が身近には見当たらないが、凍てた優しさをはぐくみ溶かしていこうと、芽吹きの春を待っている。（疹）

投稿

紅葉山人
赤倉・直江津来遊記

■村山和夫



「金色夜叉」日本近代文学館の絵はがきより

紅葉山人・尾崎紅葉は、明治三十二年（一八九九）夏、赤倉・直江津・新潟を経て佐渡に赴く旅に出ることになった。旅は気がむけば逼留する四十日にもおよぶ長旅となった。

生来、旅を好まない紅葉が重い腰をあげ、「出億却六年の習癖を破って」旅に出ることになったのは、『金色夜叉』の執筆で神経衰弱気味になり、病を癒すには「煙霞にしくなし」と、医師に強く薦められたためである。

この越路紀行は、同年九月一日から十一月三日まで「煙霞療養」と題して「読売新聞」に連載され好評を得た。

七月一日、「煙霞療養」の旅は始まる。上野駅に行くと、前日からの豪雨で「田口駅以北は不通」。何とかならないものかと鉄道案内を開くと、田口駅のページに「赤倉温泉あり」とある。〝禍を転じて福となす〟の故事にあやかりたいと、まずは赤倉に向かうことにした。

夕刻五時過ぎ、田口駅に単衣に薄羽織姿の青年文士紅葉が降り立った。駅前の「桜屋」で小休息の後、二人がかりの人力車に乗り、降りしきる雨の中、羊腸の山道を鶯の声を聞きながら、六時三〇分頃「香嶽楼」に着いた。一夜明けると雨も上がり、宿から頸城平を一望し、遥か佐渡も遠望できる。

北の方直江津の空に方りて、有りと見えては、浪の揚るがごとく、なしと疑うては、霞の浮ぶに似て、しかもこの楼の縁側から見ゆる所が一奇である。

口あいて佐渡が見ゆると涼み鳧
涼風のわが眉太し佐渡ケ島

と、赤倉の風光明媚を句を添えて称揚している。また、村の姿を

作物は皆無、仕事は出来ず、商は利かず、湯治ばかりでは立たず、活計に差支へるので、次第に村の煙りは細くなるばかり（略）此ほど山水の勝を占めた温泉地は無いのであるが、又、此ほど寒酸の極に陥った町並を見た事がない。（略）二三の店を除いては皆自炊宿の棟低く、屋根朽ち、軒は傾き、格子窓さえ破れて、見る影も無き散々の体。（略）異しく感ずるのは、外湯の浴場の不相応に荘重しく新築せられたるのが三箇所に聳えて、五色硝子の欄間に満目の荒涼を照すのである。見もて行けば、家々に馬鈴薯が乾してある。是が唯一の産物たる葛粉に製せらるので、正真の葛も出る趣。外には蕎麦粉、竹細工と聞いたが、いづれも儚い物ばかり。

と、これほど風光に優れた温泉地は数少ないと激賞しながらも「寒酸の極に陥った」と、寂れた様子を案じている。

食通紅葉の興味をそそったのは、「氷室」（雪鳰）であった。

深さ一丈ばかりの穴倉に貯えられた雪は半消えて、周囲もおよそ一尺の量を減じて蛇目をなしている隙間に、鯛、甘鯛、赤えい、川鱒、鶏肉などを縄に懸けて、吹矢の人形のやうに吊下げて、別に野菜の類は籃に入れて雪の表面に卸してある。（略）明に照す処々に、赤き鱗の花と見紛うばかりなるが点綴する状といふものは、是真画中の逸品たるべき好粉本として見らるるのであった。



尾崎紅葉





上　明治期の香嶽楼　（「交易・交流の旅」　西澤稜威雄著より）
　　自炊を主とした温泉宿の中にあって近代旅館として人目を惹いた
下　赤倉温泉と妙高（「上越ふるさと百科」より）

舌鼓うつや氷室の桜狩

と、紅葉を満足させ、添えた句に「氷室の桜と見付けた手柄が、我ながら無に為しかねる」と自賛している。

七月三日、午前六時二十分山を発ち、七時五十三分田口発の列車に乗り込む。

当時、信越線は上野・直江津間で、下越方面には直江津駅で下車し関川を渡り、春日新田駅で北越鉄道に乗り換えねばならなかった。乗り継ぎのため人力車に乗った紅葉の目を惹いたのは「女の車力」であった。「どれも兵糧炊に頼まれそうな凛々しい小爽りとした扮装で……皆屈強の新造年増、牛とも組むべき骨格である」と驚嘆している。

直江津の女性の働きぶりは『越後頸城郡誌稿』にも「直江津ノ婦人ハ丁持ト号シ荷物ノ運搬ニ従事シ、又小魚等ヲ高田及ビ在々諸所へ行商ス（略）男子モ及ハサルカ如シ」と見える。

午前九時三十分発の列車に乗り換え、午後二時四十五分、沼垂駅に到着した。新潟では漢学者の坂口五峰に会うなど五日間滞在し、ようやく佐渡へ向った。

帰途についた紅葉は、八月十日、直江津で文人市長（高田市長）として知られる川合吟風らによって引き留められ、当地屈指の料亭、三宜楼に一夜を過ごすことになる。残念ながら「煙霞療養」には連載されていないが、佐渡土産」の名で「新潟新聞」に寄稿した一文に、

（略）車の直江津に着くを待ちてわりなくひきおろされたら帰りを急ぐ身のいとつらかりけれど、仇ならぬ人々の志うれしく、

此日傘あづけ申すぞけふ一日

三宜楼に上りて見渡す、五日の月は空に懸りて、田面に萬星の乱るるを訝かる。

青田暮れて其の粒々のおもい哉

涼めとやななつ踊の袖のかぜ

やらしやれを見ましょという侭に盃を把りて…。

と書いている。紅葉の気ままな旅の様子と、迎えた直江津の人々の心くばりが偲ばれる一文である。

三宜楼で紅葉を囲み宴を共にしたのは、川合吟風（直次）、上原柏舟（慶三）、早川破鐘（利三郎）、石塚豊作、片田九皐（九十八）、佐藤忘羊（文吉）、横山桜雲らで、幹事は直江

香嶽楼
高田上職人町（大町三）の旅館「三友館」を経営する三館一郎が、信越線建設のために来越した鹿島組棟梁鹿島岩蔵と知り合い、鹿島組の協力を得て明治二十年頃、赤倉温泉の開発に乗り出して、「香嶽楼」設立したものである（『にんげん交流術』西澤稜威雄著）。紅葉が来遊したのは、その十年後のことで、経営者は村山伊之吉に移った。

北越鉄道
明治二七年（一八九四）、渋沢栄一、前島密を始め県下の資本家を株主として設立。三十一年、春日新田・沼垂間が開通。午前・午後各二便あった。開通は、紅葉来越の前年のこと。

津小学校長の上原が務めた。
かねて上原柏舟が克明な日記を付けていたことを聞きおよび、柏舟の孫の上原勲氏（愛知県津島市在住）に、「柏舟日記」についてお尋ねしたが、「手許には大正期のものが数冊しか残っていない。明治期の日記は、以前、調べものがあるということで貸し出し、そのまま戻らず散逸した」とのお答えであった。明治はさらに遠くなってしまった……。

昭和七年（一九三二）、香嶽楼の村山伊之吉は、吟風・川合直次に撰書を依頼し、「紅葉山人碑」を庭前に建立した。碑は、多くが漢文で書かれるなか、古体国文で書かれている。
除幕式には、紅葉の嗣子夏彦、未亡人喜久子、硯友社時代の友人江見水蔭ら紅葉ゆかりの人々が参列した。水蔭は碑に花を添え、



明治三十二年七月一日そぼろふる小雨に夕冷のするころ／一輌の人車が香嶽楼門前に停まった／それは一代の文豪紅葉山人が／出億却六年の習癖を破って／越後路の旅へと思ひたち／第一の宿りをここに求めたのであった／逼留僅に二夜に過ぎなかったが／遥に日本海を瞰しては（涼風のわが眉太し佐波ケ島）と口ずさんで／日本一の眺めと折紙を附け／庭前の雪室を覗いては（舌鼓うつや氷室の櫻狩）と興じて俳諧のない人を惜しみ／煙霞療養一巻この温泉の名声をして頓に海内に高からしめた／しかし巨星隕って三十年／文壇またこの絢爛の筆なし／赤倉の山人に負う所眞にに多し／
昭和七年五月八日
高田市長　川合直次　撰竝書

註、文中の／印は句読点に相当、（　）内は紅葉の泳じた句を示したもので、読みの補助として挿入した。

紅葉山人碑成るを祝して
建碑成りて夏鶯の声のよさ
吟風詞宗に
五月時に碑文ひとしお尖りけり
除幕式の朝
一茶来い良寛も来い紅葉の碑成る夏
佐渡を望みて
夏霞引眉毛なと見せよ佐渡

と、句を献じている。
吟風は碑の除幕にあたって、当時を回想して「高田新聞」（昭和七年七月一日付）に、
山人の赤倉へ見えたのは三十四年前、即ち明治三十二年の今月今日である。（略）山人は赤倉に泊り、新潟に赴き、それより佐渡へ遊び八月中旬帰郷の途次一寸直江津へも立寄った。実は無理に引おろして一夜泊って貰ったのである。（略）山人は三十三歳、私は二十六歳の時であった。山人の文字は小気味よい程洗練されているが、その話口もぎきびきしていた。（略）直江津の「ヤラシャレ踊」を見ては「少し雑駁だ、色々の物が混じったのだろう。段数が七つ、どうです七つ踊と改めては」など提した。（略）「煙霞療養」は未完成のまま残され、直江津の事に書き及んでいない。真に遺憾だ。

と、語っている。

■元上越市史編さん委員

建物さんぽ　その九

草木の果てまで譲り受けて

国道四〇五線を岩の原葡萄園へ行く途中、「稲」という地名があることは知っていたが、いつも通り過ぎるだけだった。国道の両脇は地名の通り水田が広がり、雪が残る旧道沿いに細長く民家が点在している。

その稲に、昨年十二月にオープンしたばかりの「おたっしゃ館」（高齢者向けのデイホーム）を訪ねた。

建物は昭和三年、稲の旧家であるお医者様の隠居部屋として、用水を隔てた母屋の裏に建てられた。座敷は床の間も書院も銘木のなかから更に厳選した素材を用い、繊細な造作が施されている。欅の広幅板を敷き詰めた縁側から竹林越しに土蔵が見える。決して広いわけではないが、落ち着いた空間が連続する。

縁をめぐり、広い浴室に入ると「折上げ格天井」に驚く。寺院の内陣などに用いられる格式の高い意匠である。檜の羽目板、腰壁は象牙色がかった白いタイルで仕上げられて、腐朽も狂いもなく、今でもきちんと納まり、大切に扱われてきたことが分かる。

建物は介護施設にするため、一部、畳を床板に張り替え、トイレや浴槽を新設したが、建物のオリジナルを損なわないよう、材料も本物を使い丁寧に改装された。茶の間の天井も外して、立派な欅丸太の胴差二段が見えるようになった

代表の瀬下さんに、ここまでの経緯を伺えば、―ばらばらであった様々の要因が、時機を得て、この場所に収斂してきた―ように感じられる。

瀬下さんは七年前、たまたまこの建物に出逢った。たちまち、その佇まいが好きになり、使うべき目的もはっきりしないまま、草木の果てまで総てを譲り受けた。

ちょうどその頃、ご自身は長年の看護師の勤めを辞そうと決めていた。転職というわけではなく、たぶん「やり遂げた」という想いに満ちていたのかもしれない。そして、充電期間に終末医療や介護のことを学び、昨年の一月、

自分でやってみたら？　あの民家で――

という友人の言葉に、―きっと、自分のこれからの人生も豊かにしてくれだろう―と、その言葉に従った。あっという間の一年、物事は一気に動いた。

以前、自宅の古い家を解体したとき、廃棄するには忍びなく、もったいないと保管していた古材も再利用した。完成祝いにお招きした元の所有者にも感動していただいた。

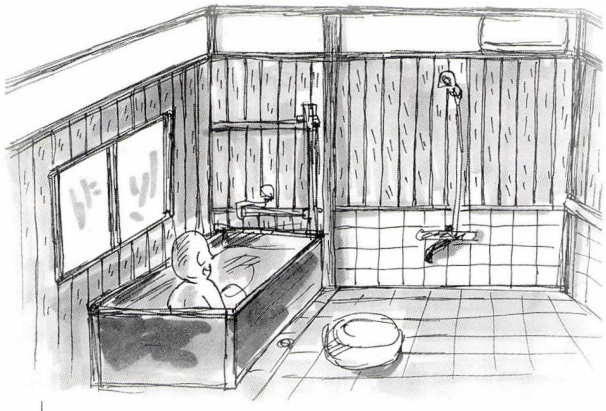
瀬下さんは、第二の「仕事」として自ら選んだ道だけど、ここにいると、この建物と一心同体、ゆったり

とした時間を過ごしている気持ちになる。建物はすべて本物の素材と丁寧な職人の技で作られている。だから便利でも上辺だけの薄っぺらなものを遠ざけるようになり、本物に対する意識が深まってくる。このことこそ、戦後の日本を支えて生きてこられたお年寄に、人生の最期の時を過ごしていただく場として大切なんだ、と思う。

昨年暮れから認知症の介護も始まったが、話には聞くものの、私は、その本質も実態もなかなか理解できないでいる。「おたっしゃ館」のような場に受け入れてもらえると思えば、分らないなりにも救われるような気がして、雪晴れの陽射の中、稲をあとにした。

春の陽光に包まれる季節も、きっと素晴らしいだろう。





デイホーム「おたっしゃ館」
代表瀬下和子
文　せきゆうこ
画　ひぐちきみよ

上越信用金庫　上越産業振興研究所レポート

上越の近代産業の礎（もとい）「バテン」

研究員　佐藤和夫

「バテン」とは

「バテン」とはバテンレースのことである。型紙に描かれたデザインそってコードあるいはブレードというテープを縫いつけ、内部を模様に沿って糸でかがっていくレース編みのことである。

発祥地はドイツのバテンベルク、あるいはその王族の考案であるとされてきたが、上越教育大学の赤羽孝之氏は、「アメリカの手芸家サラ・ハードレーが考案し、バテンベルク家の御用達をねらって命名したのであろう」としている。（詳細「上越市史叢書1」バテンレースと細幅織物）

バテンレースの導入

明治時代、主要輸出品である生糸を素材のまではなく、付加価値の高い製品としてレースやハンケ（カ）チなどに加工し―日本女性の手先の器用さもあって、輸出の花形品目のひとつとなった。その一環として、バテンレースの技術も明治二十年代に日本に導入されている。

上越には明治三十一年に横浜の飯島保太郎によってもたらされた。

これより前、明治十九年の旧村松藩士木戸信次郎が大手町にハンケチ工場、高田女工場を開いており、木戸を技術主任として飯島商会が支店を開き（士族の授産活動に熱心であった人たちがバテンに着目して、木戸を通じて飯島商会を誘致したという説もある）、横浜から二人の女性指導員が派遣され、工女たちが最初に手ほどきを受けた。

ハイカラな手工芸として、また炬燵でも作業ができるので、冬の手仕事として高田を中心とする上越地域に、あっというまに普及し、主要産業へと発展していくことになった。

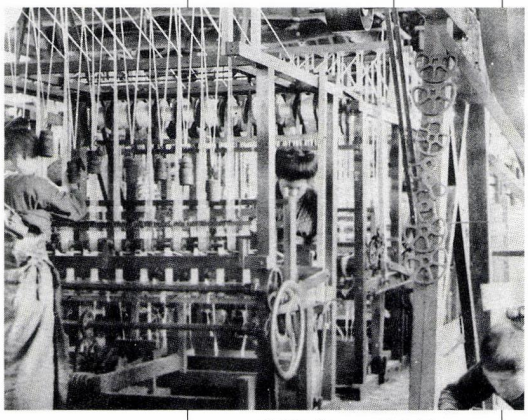
生産システム

バテン屋あるいは元工場と呼ばれる元請業者が商社から受注すると、注文のデザインを型紙に起こし、糸、ブレードとともに、ポイント・分場・中継ぎなどと呼ばれる取次ぎ店に持ち込み、ポイントは配下の職人の数に合わせて受け取り、職人に配分する。製品は逆コースをたどり、バテン屋で補修・洗濯・アイロンかけなどの仕上げをして納品する。

産業としてのバテン

バテンの生産額は、導入わずか十年の明治四十三年には二五万円となり、羽二重の三十万円に次ぐ二位になっている（高田市史）。

当時、主要原材料のブレードは輸入に頼っていたが需要に追いつかず、また高価であるため、同年に東洋ブレード会社（有沢製作所の前身にあたる）が設立され、ブレードの生



東洋ブレード会社

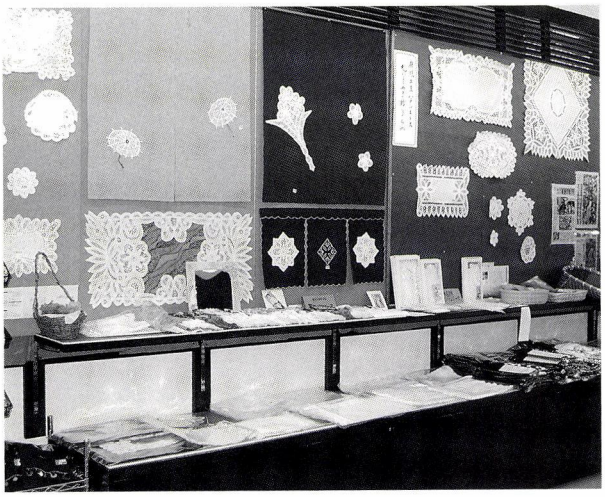
産も開始された。以降、多くの細幅織物工場が出現することになる。

この当時の高田の産業は、生糸、羽二重、バテン、ブレード、木綿織物など繊維産業が主力で、中でもバテンは取次ぎ店が十四、従業者数が八千人にも達している。「高田商業地図」（明治四四年発行）を見ても「分場」という名前が数多く読み取れ、いかに手仕事として流行していたかが分かる。

バテンの変転

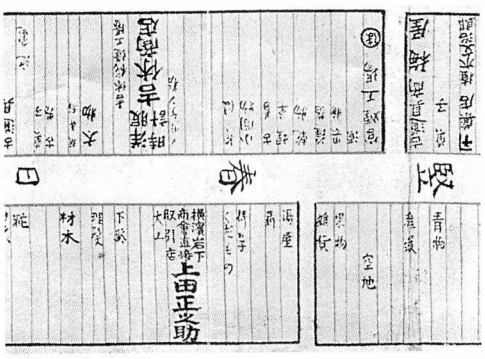
バテンは、明治末には全国生産の二五％を占めるまでにいたるが、二つの大戦のなかで、ブレード工場は軍需工場となり、当然のごとく、輸出は言うまでもなく国内需要も無くなった。第二次大戦後、国内のバテンレース産業は高田のみ再開されている。これはブレードを主力とする細幅織物工場がいち早く再開し生産できたためであろう。

再開されたバテンの輸出は昭和三十年代にピークを迎え、高度経済成長により家庭用ピアノなどの装飾品として国内需要も伸びるかに見えたが、高度経済成長は多様な職場を提供し、賃金効率の良い職を求め、バテンの職を離れる人が増えて生産が低下し、バテンは上越の伝統産業・特産品として新たな道を歩み始めることになった。



上越の特産品として上越観光物産センターで販売されるバテン製品

「高田商業地図」に見える上田商店
（現・本町１　植木医院の向かいあたり）





店頭で集荷したバテンの仕上げをする上田商店
（新潟県写真発展号より）

細幅織物工業の自立

バテンを支え、戦後いち早く復興した細幅織物工業は、ファスナーテープを上越の業界で独占していたこともあったが（市史叢書１）、昭和三十五年、ＹＫＫが自社生産を始めると、バテン同様、廃業や大きな転換を余儀なくされることになった。

意外に知られていないことだが、ＩＴ産業や宇宙開発のための新素材繊維製品の開発、医療用や高温対応の新素材テープ、シートベルト、スリング・ラッシングベルト、パラシュートベルトなど高機能織物ベルトなどを生産し、なかには東証一部上場に至る上越の企業は、バテン産業によって生れた細幅織物工業がその礎になっているのである。

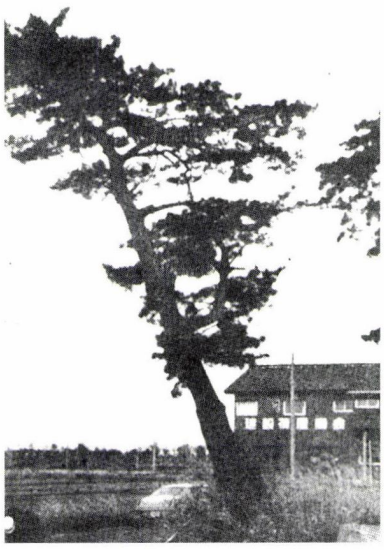
参考　上越市史叢書１「バテンレースと細幅織物」／「高田市史」／「高田富史」／「バテンの家」／「バテンの家」は、バテンの加工業者の生活と高田の風土を描いているが、バテン生産のシステムがよく分かる。作者の井東汎（故人・田中武）は高田の人で、高田文化協会や「文芸高田」、その前身の「文芸冊子」の創立に関った人である。

アルバムの一枚

「崩壊」した加賀街道の松



崩壊した松
右　昭和47年撮影
左　平成10年12月撮影



昭和30年代初頭





平成20年1月1日撮影
左　中が空洞だった



上越市内を通る北国街道のなかで、五智から春日山下周辺を昔から「加賀街道」と呼んで親しまれてきました。名前の由来は加賀百万石の殿様の参勤交代の道だったからです。

道の両脇には松が植えられて、高田藩によって手厚く保護され、殿様だけではなく多くの旅人を夏の日差しや冬の風雪から守ってきました。明治以降は藩の手を離れ、水田の日陰になるという理由から伐採されたこともあったようですが、昭和三十年代まではハサ木に利用され、稲刈りのあとは黄金色の壁になった時期もありました。

松が集中する国府三丁目地内には、昭和四十八年の上越市文化財調査報告書「加賀街道松並木」によると十六本残っていました（平成十九年十二月の時点で七本。枯れた後へ新しく植えなおしたものもある）。

報告書を読むと、松が枯れたり幹が空洞になった原因に、道路の整備や宅地化によって根が切断されたことがあるのではないかと思われます。

「崩壊」した松も、右の調査の時点で根が断ち切られ、幹の内部が空洞化し雨水の侵入を防ぐ必要があると指摘しています。十二メートルもあった樹高の途中から切られ、空洞に雨水の侵入を防ぐ処理もされていましたが、昨年の大晦日、風雪（落雷説も）によって、まさに「崩壊」しました。

発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越（かみえちご）後全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

平成十三年三月

発刊当初の直江津信用金庫は平成十六年一月高田信用金庫と合併、上越信用金庫となった。

■編集室から■

「大持引」を見ていて、中ノ俣集落は、ほとんど高齢者にもかかわらず、非常に元気な方が多いような気がする。あちこちで「限界集落」という、いやな言葉が当たり前のように言われているが、本来「元気」を支えるべき側が「限界」というレッテルを貼って、引きずり降ろそうとしている気配が感じられる。

シリーズ「上越後のかたち」は、上越の自然が作り出す地域性や食文化などにも言及していく予定である。

第8巻2号　6月1日　発行予定

年間定期購読（4冊1920円・送料込み）を受け付けております。ご希望の方は編集部までご連絡ください。

季刊「直江の津」春号
第八巻一号　通巻二十九号
発行日／平成二十年三月一日
発行所／直江津経済文化研究会
上越市中央二－一－八
上越信栄社内
☎〇二五(五四五)〇二〇二
発行者／上越なおえつ信金倶楽部
発行責任者／中川虎三
編集協力／(有)北越出版
責任者　佐藤和夫

内容・投稿などの問合せ先
北越出版
上越市国府三－九－五
〒九四二－〇〇八二
TEL〇二五(五四二)九七一五
FAX〇二五(五四二)二〇二五
E-MAIL hokuetu@seagreen.ocn.ne.jp

季刊

直江の津



発行／平成二十年三月一日■発行者／上越なおえつ信金倶楽部■制作協力／(有)北越出版■表紙基本構成／小谷充■表紙構成／(株)桐朋・木南康子

頒布価格／三〇〇円（送料一八〇円）